長野環境人士

自然に優しく、暮らしを楽しく

小林光さん対談企画

地球温暖化や気候変動を実感する機会が身の回りでも増えている。世界レベルで国、県、市町村レベルで環境問題への取り組みが重要性を増している。一方で自然のためとは言え、暮らしに過度な制限を掛けるのは窮屈で持続が難しい。自然に優しい生き方、暮らし方とは何か。長野県で「環境の良き一部に人間がなることを楽しんで行っている人」にそのヒントを探りたい。茅野市湖東と都内で二拠点生活を送る元環境省環境事務次官で、人間社会と自然環境との関係の再構築について研究している小林光さん（73）を招き、対談企画を連載していく。

沖野外輝夫さんと語る

諏訪湖浄化について思いを語る沖野さん

諏訪湖の浄化に長年かかわってきた沖野外輝夫さん（86）＝諏訪市＝は1973年に諏訪に移り住み、半世紀。移住前、富栄養化が極度に進み、アオコが社会問題となっていた頃から研究者として諏訪湖と向き合い続けてきた。

諏訪湖の水質改善対策は、県と関係市町で組織した諏訪湖浄化対策協議会が1965（昭和40）年に設置した「諏訪湖浄化対策検討委員会」の調査研究と提言を基にしている。アオコ発生の原因となるプランクトンの異常発生対策として、県は諏訪市豊田に諏訪湖流域下水道豊田終末処理場（クリーンレイク諏訪）を整備。さらに湖内に蓄積した富栄養化の原因となる栄養塩類の除去のための底泥のしゅんせつが行われた。クリーンレイク諏訪は1979年10月1日に一部供用開始。環境保全目的のしゅんせつは1969～2002年度に行われ、07年度までにしゅんせつ土の処理を終えた。現在は治水、利水目的のしゅんせつが行われている。

沖野さんは諏訪湖浄化に向けた基本計画の実行段階からかかわってきた。研究と提言に加え、諏訪地域の公民館活動で開かれる諏訪湖の浄化に関する講座の企画に関わり、講師も務めた。6市町村で行われた講座を通じて諏訪地域の住民の湖への関心を醸成。市民レベルでの活動拡大につながった。講座について「諏訪湖の周りだけでなく、上流部の皆さんにも湖との関係を知ってほしいという思いで続けた」と振り返る沖野さん。農耕地から流出する栄養塩類の対策や森林整備の重要性を訴え、「森林に手を入れていくことが諏訪湖の環境改善やその先にもつながっている」と強調した。（野村知秀）

＝12面に対談